

岐阜大学 教育推進・学生支援機構年報 第8号 発刊にあたって

岐阜大学教育推進・学生支援機構長 山田 敏弘

平素は岐阜大学教育推進・学生支援機構の活動にご理解とご協力を賜りまことにありがとうございます。

令和2年4月、名古屋大学との法人統合を機に、教育推進・学生支援機構組織を、アドミッションセンター、基盤教育センター、学生支援センター、教職課程支援センターの4センターに改組して丸3年、機敏に、かつきめ細かく活動を続けて参りました。その間、大学入学共通テストが始まり、コロナ禍の困難にあっても受験生に公平公正な受験機会を与えるために細心し、全学共通教育ではICTを活用した自動翻訳の時代に合わせて第二外国語科目を、語学中心の演習科目から文化を知ること重点を置いた講義科目に変更致しました。さらにコロナ禍で経済的にも苦しい学生を支援する一方で、広く学生には大学生生活を謳歌してもらえよう感染対策とのバランスを取りつつ競技大会などの活動支援もして参りました。

時代はさらなる変革を求めています。この変革を乗り切ってさらに大学教育のファーストペンギンとなるべく岐阜大学は名古屋大学との連携も深めつつあります。相互の大学の授業科目として自由に単位を取れる連携開設科目の実施への足がかりを築き、名古屋大学の作成した数理データサイエンスAI科目のコンテンツを活用し、本学の全学共通教育科目として実施しようとしています。また、外国語を学ぶ際にも基礎となる母語である日本語の表現力を向上するために、日本語表現科目を全学必修としました。名古屋大学との連携をしながら本学の学生に合ったよりよい教育を提供する改善は、不断に続けています。

課題も多くあります。毎年5%カットを余儀なくされる大学予算に、本機構も対応していかなければなりません。また、新時代のニーズに合わせた新たな改組も必要になるでしょう。さまざまな課題の答えは暗中模索。まさに、教育推進・学生支援機構教員をはじめ多くの教職員の日頃の切磋琢磨の結果が詰まった本年報の中に、その答えのヒントを探せるものと期待する次第です。

この第8号では、新たに設置された各センターの活動報告に加えて、研究論文*本、実践報告1本、実践報告4本、そして本学の学部生を対象に毎年開催しております「岐阜大学学生レポートコンテスト」の入賞作品3本を掲載しております。変革の時代であるからこそ、岐阜大学独自の強みを活かせる、そんな萌芽の詰まった論集に仕上がっております。ご一読いただければ幸いです。